地域の情報をお届け！ 呉トピックス part1

食と農を楽しく学ぶ ちゃぐりんフェスタ開催

８月27日、小学校の夏休みを利用して江田島市の中町児童館で「ちゃぐりんフェスタ」を開催し、江田島市立中町小学校の１年生から４年生まで24人が参加しました。

令和４年度から江田島市教育委員会生涯学習課と連携し、家の光協会の子ども向け雑誌『ちゃぐりん』を活用して子どもたちに食と農に興味を持ってもらおうと取り組んでいます。

シュワシュワおいしい「コロコロラムネ作り」

ＪＡひろしま女性部呉地区本部中町支部の部員のみなさんが講師になり、『ちゃぐりん』を使った「コロコロラムネ作り」に挑戦。児童は手作りのエプロンをつけ、コーンスターチなどの粉類にかき氷のシロップを混ぜ、計量スプーンで押し固めて作りました。

出来上がった
色とりどりのラムネは
「シュワシュワしておいしい！」
と大好評でした。

「お米の作り方」～家にお米が届くまで～

ＪＡ職員から『ちゃぐりん』の紹介を受けた後、ＪＡ営農販売課の営農指導員を講師に、お米がどのようにして作られているか、土づくり、種まきから収穫までの流れについてクイズを交えながら学びました。

なるほど え～のう！ 営農情報

落葉果樹

イチジク

▽採収

採収も終盤となります。

秋の深まりとともに気温も下がるため、小玉果や未熟な果実が増えてきます。

今年の採収を終えたあとも、いくらか果実が樹上に残っていると思います。

今年は梅雨時期の降雨が多かったため、例年よりも多く病気が発生しています。

樹上に残った果実をそのまま放置すると、翌年の病害虫の発生原因となるので、可能な限りすべて摘果し園外に持ち出して処分するように心掛けてください。

▽間伐

密植園では、作業性や風通しが悪く、また日照不足となることから、着色不良や病害虫の発生など、品質低下を招きやすくなります。

せん定で樹を切り詰めようとすると、強せん定となり、勢いの強い枝が多く発生し、果実肥大の低下や熟期の遅れ、着色不良などで品質が低下してしまいます。

葉があるうちに園地の混み具合をみて、密植になっていたら間伐を行ないましょう。

イチジクは、植栽後の樹冠拡大は他の品目と比べ早いです。

植栽間隔は広くとるようにしましょう。

カキ

▽元肥の施用

元肥は葉にチッ素を供給し、翌年の貯蔵養分を蓄える働きがあります。

施用時期は、10月(気温が高く葉のある時期)に施用するのが重要となります。

落葉後に施用しても吸収されないので遅れないように注意しましょう。

ただし、強勢な芽が多く出ている場合や、葉が大きすぎる樹へは施用を控えてください。

モモ

▽元肥

夏季の葉の大きさや葉色、徒長枝(勢いの強い枝)の発生本数などで、元肥の施用量を調整します。

樹勢の強い場合は施用量を少し減らしましょう。(表1)

施肥時期は、カキ同様に地温の高い10月中にを施用しましょう。

▽土壌改良

モモは他の果樹に比べ浅根性で成長が早く、成園に早くなります。

細根が少ないとすぐに樹勢が弱ってしまいます。特にマサ土(花崗岩土壌)は水はけがよく、乾燥しやすいため、樹勢が弱ると若樹でも幹からゼリー状の物質が発生することがあります。

土壌改良により細根量を多く保つことが重要となります。

また、耐水性にも弱いため、水はけが悪い園地では、明きょや暗きょなどの排水対策を行なったうえで土壌改良を行なうとよいでしょう。(図1)

表1　7月～8月の葉の重さによる樹勢診断指標（清水白桃）（「果樹」より）

樹勢	弱い	適	強
葉の大きさ	小さい	普通	大きい
葉の縦の長さ	15㎝未満	16㎝前後	18㎝以上
葉の重さ	0.9g 未満	0.9 ～ 1.1g	1.1g 以上

岡山県果樹栽培指針

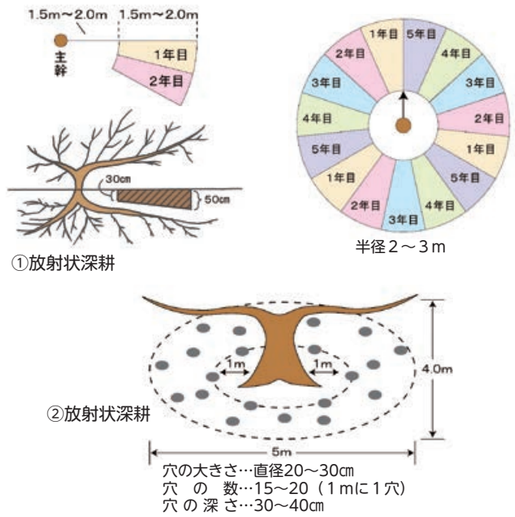

図1　土壌改良の方法（「因伯の果樹」より）

キウイフルーツ

▽潅水

乾燥が続く場合は、葉が傷み落葉することがあります。

引き続き、適度な土壌水分を保ちましょう。

ブドウ

▽縮伐

成木をひと枝単位で切り縮める時期は、収穫直後となります。

落葉後、貯蔵養分を貯めきった後では、春先の地上部と根のバランスが悪くなり発芽にバラツキが起こりやすくなります。

> **MEMO**
>
> 今年の秋の気温は、平年よりも高くなると予想されています。
>
> みなさんも天候に振り回され、バテ気味となっていると思われますが、植物も疲れ切っています。
>
> 人も植物も、疲れを回復させるために栄養補給など様々な取り組みを行ないましょう。
>
>

家庭菜園

10月になると気温も下がり、昼夜の気温差も大きくなりはじめます。ビニールハウス等の資材を有効に活用して温度管理を行ないましょう。また、作物ごとに発芽や生育に適切な温度に注意し、種まきや苗の植え付けのタイミングを逃さないようにしましょう。

10月からの栽培に適した代表的な野菜はシュンギク・コマツナ・チンゲンサイ・えんどう豆などありますが、次の3つをご紹介します。

ほうれん草

ほうれん草は冷涼な気候を好み寒さに強く、日当たりのよい暖かい場所なら12月頃まで栽培できます。秋まきは10月～11月で、種をまいてから約2カ月で収穫できます。

・発芽適温　約15℃～20℃
・土壌酸度　pH6・0～6・5

○ポイント

発芽適温を守り、病気や発芽障害の発生を抑えましょう。

発芽するまでは乾燥を嫌うため、晴れた日は水やりを欠かさないようにしましょう。

酸性土壌に弱い性質を持っています。土壌酸度に注意しましょう。

気温が低いときは、透明なビニールでトンネル掛けをするなど対策しましょう。

〈間引き〉

株間が狭くても育ちますが、密植すると葉色が淡くなって葉肉も薄くなります。発芽したら収穫までに定期的に苗を間引きましょう。

・1回目　本葉1～2枚の時
　株間を3㎝ほどに
・2回目　本葉3～4枚の時
　株間を6㎝ほどに
※間引いた小さな苗は柔らかく食べることもできます。

カブ

カブは冷涼な気候を好むアブラナ科の根菜類です。種まきをしてから約2か月で収穫できます。

・発芽適温　約20℃～25℃
・土壌酸度　pH6・0～6・5

○ポイント

発芽するまで水を切らさないようにしましょう。

芽が出てからは土の表面が乾いてから水やりをしましょう。

高畝など水はけを良くし、根こぶ病の発生を防ぎましょう。

寒冷紗などを利用して幼苗期の害虫被害を抑えましょう。

〈間引き〉

発芽が揃い、本葉が1～2枚ほど出たタイミングで間引きの作業を行ないましょう。

葉の色や形が異常なもの、生育の悪いものや左右対称でないものを間引き、1カ所あたり育ちの良い苗を2本程度残しましょう。

間引き作業は根の部分を太らせるために重要です。適切な時期に行ないましょう。

ソラマメ

ソラマメの栽培時期は秋から翌年の春に掛けてまでで、収穫まで7～8カ月ほどかかります。

・発芽適温　約15℃～25℃
・土壌酸度　pH6・0～6・5

○ポイント

「お歯黒」を斜め下に向けて、浅植えにしましょう。

根に「根粒菌」が発生し養分となる窒素を作り出すため肥料は少なめでも構いません。

肥料過多になると茎葉ばかりが生い茂り「つるぼけ」になるので注意しましょう。

〈支柱立て〉

苗は風の影響を受けやすいため草丈が60㎝ほどになったら支柱を立てましょう。

露地栽培の場合は1・5m程度の支柱を苗の両側に2本ずつ立て、ひもを30㎝間隔で3～4段に張っておきましょう。プランター栽培の場合は、春に側枝が伸び始める前に数本の支柱を立てて紐で誘引しておきます。

〈連作障害〉

連作障害が出ると立ち枯れを起こし、生育が極端に悪くなります。休耕期間は3年ほど取るようにし、過去5年間はそら豆をはじめとしたマメ科を栽培していない土で育てましょう。

地域の情報をお届け！

呉トピックス part2

地元中学生が職場体験

JAひろしま蒲刈支店とくれ選果場は8月20日から3日間、呉市が取り組む「呉市キャリアスタートウィーク」に協力し、呉市立蒲刈中学校2年生1人を受け入れました。

生徒は柑橘類の生産現場と出荷作業を担う選果場で選果工程について学び、購買店舗では品出しやレジ打ち、移動購買車で組合員に商品を勧めるなど接客を体験しました。

体験した小寺奏汰さん(13)は「住んでいる町にたくさんみかんの樹があることに驚いた。学んだことを学校生活に活かしたい」と話しました。

蒲刈支店の今村一士支店長は「JAがどのような仕事をしているか、現場を見て体験したことが将来の進路選択の一助になればうれしい」と話します。

▲かんきつの説明を受ける小寺さん

大きくなった稲穂を観察

呉市立昭和南小学校5年生15人は8月22日、呉市郷原町で水稲を栽培する中谷信雄さんの田んぼ(3・5a)で「ヒノヒカリ」の稲穂を観察しました。稲は5月中旬に児童らが植え付けたもの。

この体験学習は、呉市が取り組む食農教育の一環としてどのように農作物が作られているか知ってもらおうと取り組み、地元の生産者とJAも協力しています。

児童は中谷さんや市職員から、稲穂が出てくるまでの過程や田んぼの環境について学習。稲の花や稲穂をタブレットで撮影し、状態を詳しく書き取り、田んぼにすむ生き物も観察しました。

児童は「3本の苗がこんなに大きくなっていておどろいた」「花は小さくてかわいい」「おいしいお米に育ってほしい」と笑顔で話しました。

▲熱心に稲穂を観察する児童

やさしく植え付け 呉の伝統野菜「広甘藍」

9月4日、呉市立両城小学校4年生19人が呉市郷原町で地元の伝統野菜「広甘藍」の苗およそ300本を植え付けました。体験圃場を提供したのは広カンラン生産組合の田中慎二さん(55)。同校の総合的な学習の授業の一環で呉市の農業体験・食農教育支援事業を活用、12月には収穫と販売を体験する予定です。

呉市職員から「苗を折らないようやさしく」と植え付け方のアドバイスを受けた児童は、生産者やJA職員に手伝ってもらいながら、手作業で植え付けたあと、ペットボトルで液肥を施し、虫の食害を防ぐネットを張って一連の作業を体験しました。

児童らは「ちゃんと植え付けられるか不安だったが、楽しかった。初めて見る広甘藍。大きく育ってほしい」と作業に汗を流しました。

▲教えてもらいながら丁寧に植え付ける児童

管内部会が切磋琢磨 ブランド力向上へ

呉地域管内のこだわりいしじ出荷部会と江田島こだわりみかん部会は9月4日、呉市蒲刈町で「こだわりいしじ」と「こだわり早生」を栽培する園地の視察と情報交換会を開催しました。呉市倉橋町、蒲刈町、下蒲刈町、江田島市から部会員26人、JA関係者14人が参加しました。

雨水が入らないよう丁寧にシートマルチを被覆し、摘果の行き届いた肥大の良好な優良園地3カ所を視察。日ヤケ果対策として気象状況に応じた新たな摘果技術の導入や薬剤散布による軽減方法を検証すること、いしじ温州の主幹形栽培における剪定技術の実証等を現場レベルで行なうことを申し合わせました。

こだわりいしじ出荷部会の落海政博部会長と江田島こだわりみかん部会の胡子雅弘部会長は「見学した園地はどれも手入れが行き届いていて参考になる。部会へ持ち帰って会員で共有し、生産量、質の向上に役立てたい」と話しました。

▲「こだわりいしじ」の園地を見て回る部会員ら